

## 神奈川県で発見した大複殖門條虫症の一例

藤 沢 俊 雄 金 子 義 一

国立横浜病院内科 (科長 古城美一)

(昭和 31 年 7 月 10 日 受領)

1955年私達は神奈川県下で感染したと思われる大複殖門條虫症を一例経験した。此の條虫はその生活史も、従つて人体への感染経路もまだ判っていない。又此の條虫症の症例報告も今迄の所日本のものだけで、それも僅か 20例を数えるにすぎない。そこで私達の症例もここに追加報告して今後の研究者の便に供したいと思う。

## 症 例

大〇時〇郎, 男性, 39歳。

経歴: 1916年, 現在の藤沢市辻堂二つ家 343番地の農家に生れ育つた。1932年から2年間職工として浦賀ドックに通勤, そのうち1941年迄は生家で農業に従事した。1941年工員として呉市の海軍工廠に勤務したが, 翌年東京世田谷に入隊, 部隊はすぐ満州奉天に移駐し, 此の地で終戦, その後シベリヤ, ステップ地帯のアクモリンスクに捕虜として抑留され, 1948年春ナホトカに移動, 同年11月舞鶴に送還, 以後前記藤沢市の生家で農業に従つたが, 1952年鎌倉市腰越浜上 492番地(江の島対岸)に移転し, 仕事人足として家計を立てて現在に至つた。内地帰還後の7年間に, 東京, 横浜, 平塚, 小田原などへおおむね日帰りして出かけることはあつたが, 其の他の土地に長く居たことはない。

食物の嗜好: 特別な偏食はない。住居及び家計の関係で江の島附近でとれる海産魚類はよく食べる。アジ, イワシを酢で殺して食べるのは特に好物と言う。その他, サンマ, ヒラメ, カツオ, マグロ等普通に食べる。淡水産魚類ではシベリヤ抑留中に鮭などを食べたことがあると言うが記憶はたしかでない。内地では塩鮭以外あまり食べたことがない。鳥鯨肉等摂取に特別な習慣はない。

家族歴, 既往歴: 特別のことなし。

現病歴: 1955年7月2日, 思いあたる誘因なく水様下痢2行, 腹痛を伴わない。翌日も同様, 4日朝依然下

痢, この時肛門から紐状のものが出来たので, ひつぱつたら切れたと言つて, 一条の條虫体(後記)を持参して当院外来受診, 駆虫の目的で即日入院させた。

入院時現症: 下痢はすでに自然に止み, 特別な自覚症はない。体格栄養中等度。平温平脈, 貧血, 黄疸, 浮腫を認めない。舌粘膜萎縮せず清潤, 心濁音界尋常, 心尖部に軽度収縮期雑音がある。肺野には異常がない。肺肝界第6肋骨上縁。腹部は平坦柔軟で, 右乳線上で肋弓下2横指径の肝を触れるが, 性状は尋常。脾は触れない。下肢腱反射尋常で知覚運動障碍等はない。血圧 138~82 mmHg。

諸検査成績: 赤血球沈降速度 7mm/1 Std., 21mm/2 Std., 赤血球数 597万, 血色素量97%ザリー値, 色素指数 0.8, 赤血球平均直径 8.3 $\mu$ , 白血球数 7600, エオジン好細胞 5%, 中性好細胞75% (核左方推移なし), 淋巴球18%, 単球 2%, 血清蛋白量 7.0g/dl, A/G 1.1, アルブミン52.4%, グロブリン $\alpha$  7.1%,  $\beta$ 14.3%,  $\gamma$  26.2% (塩析法), 尿蛋白(-), 糖(-), ウロビリノーゲンはやゝ強く陽性, 血清黄疸指数も 8 (モイレングハト値)であつたので高田反応を試みたが(-), ガラクトーゼ試験もほゞ尋常で, 2横指径触れる肝は病的腫脹とは考えられなかつた。空腹時胃液遊離塩酸 2°, 総酸度 25°, 空腹時血糖91mg/dl, ソーンテスト減少率14.5%, 基礎代謝率 - 3.2% (クニッピング氏法), 心電図異常なし, 以上二, 三の軽度異常所見はあつたが, 之等が條虫寄生に因する身体変調であるかどうかは検索できなかつた。

其の後の経過: 頭節を含むかなりの虫体部分が残存するものと考えられたので, 排便毎に全便を検査したが條虫体なく蛔虫卵(+), 鉤虫卵(+), 潜血反応(-), 條虫卵と思われるものは認めなかつた。胃腸のレ線透視も行つて見たが, 虫体を思わせる陰影欠損は証明できなかつた。約3週間の観察ののち一旦退院させ, 以後週一回外来に尿便を持参させて検したが, 條虫卵は終始(-), 虫体の自然排泄もなかつた様である。又家族の検便も行つたが條虫卵を認めなかつた。そこで, 約1カ月半の外来

Toshio Fujisawa and Giichi Kaneko: Note on a case of parasitism of *Diplogonoporus grandis*, discovered in Kanagawa Prefecture (Yokohama National Hospital)

観察後、再び入院させて、先づ型の如く、硫マ・テトレン(15球)・硫マの鉤虫駆除を行い、3条(♂2, ♀1)のツビニ鉤虫を得、次いで翌日、硫マ・フィルムロン(10g)・硫マの条虫駆除を行った。此の二種の駆虫法前後の排便は毎回その全量を仔細に検したが終に条虫体を認め得なかつた。更にサントニン(100mg)カイニン酸(20mg)の蛔虫駆除も行ったが、条虫は勿論、蛔虫も得られなかつた。

### 虫体所見

7月4日下痢と共に自然に排泄された虫体は概観第1図の通りで、長さ54.5cm, 最大巾1.9cm, 頭節を欠いているが、圧平標本で見ると第2図の通り、巾の割合いに

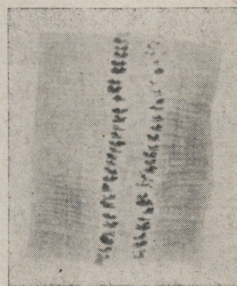
州、シベリアで軍隊生活及び捕虜生活を送り、以後引き続き神奈川県を離れたことなく生活して来たことから、本条虫が従来諸家の説える通り、海産魚類の生食から感染するものとする、現住地片瀬海岸からとれるものによつて感染したものと考えられ、関東地方にも感染の機因があることを示唆する最初の症例と言へる様に思う。

患者は食生活上特別な習慣は持たないが、家計豊かとは言にくく、海産魚類では特にアジ、イワシを酢で殺して食べるのを好物と称しており、食べる機会も、従つて量も普通人より多いのではないかと想像される。従来本条虫の中間宿主に関しては若干の探索もなされた様だが、まだつきとめられていない。江口季雄・岩田繁雄両

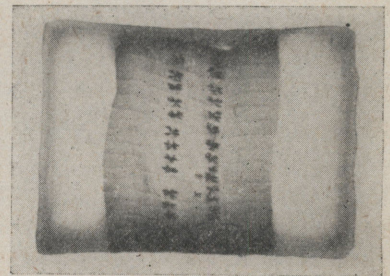
第1図



第2図



第3図

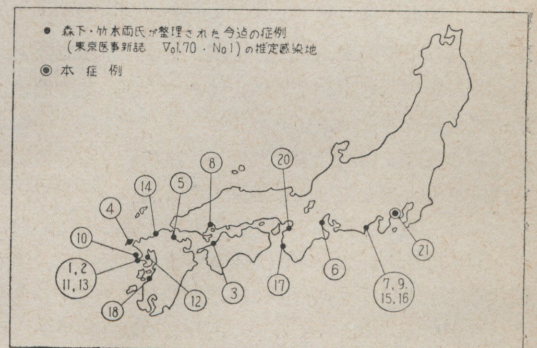


各片節の前後径が極めて短小で、中央部に近く2個の不整形の黒褐色小斑点(卵巣)がある。3個の卵巣を有する片節は認められなかつたが、2個の卵巣を有する片節が更に辺縁部で三浦離二氏(1937)の所謂二次境界線を形成して前後2つに分たれている部分が認められた。同氏から拝借した確実なる大複殖門条虫の圧平標本第3図と較べ、又成書の記載に照して、私達の得た条虫も大複殖門条虫と考へて間違いないと思う。

### 考案

本条虫は1892年中村惣一郎氏の虫体発見、1894年の飯島魁・栗本東明両氏の形態学的記載以来、時々新しい症例の報告があり、最近では森下・竹本常松両氏(1953)の一例報告がある。森下・竹本両氏は其の報告中に今迄の文献をひろつて確実な記載を整理して表示しておられ、現在迄の例数を20としておられる。今夫等の推定感染地を両氏の表の症例番号を用いて図示すると第4図の通りで、すべて静岡県以西の海に沿う地域に限られている。私達の症例は1941年から翌年迄呉市に住んだことがあるが、すでに十数年前のことで、その際感染したものと考へにくく、その後は1942年~1948年間は満

第4図



氏(1951)は、カツオを考へておられる様であるが之もまだ確証はない。Craig, Faust 両氏(1951)の著書に本条虫は普通は鯨の寄生虫であると書いてある所から、このたび財団法人鯨類研究所の根本敬久氏をわずらわして、鯨類の寄生条虫として今迄報告されたもの、及び夫等鯨類の日常の食餌を調べていただいた所、十数種類の報告はあるが、大複殖門条虫という記載はない由であつた。然しイワシ鯨を宿主とする条虫に *Diplo-*

*gonoporus balaenopterae* (Lönnerberg, 1892) という種類が報告されており、之はつとに岩田正俊氏 (1955) が人間の大複殖門条虫と形態学的に同一のものではないかと言っておられるものであつて、此の辺にも本条虫の中間宿主追及のいとぐちがある様に思われる。尚イワシ鯨からは今迄に此の *D. balaenopterae* のほか三種類の異種条虫が発見されており、又イワシ鯨の主要食餌はオキアミ類、橈脚類、ニシン、サンマ、スルメイカ、アカイカ等と言われている。

私達は本症例の診療に際して、頭節を得ようとして詳細に検索してみたが、最初自然に排泄された虫体以外、終に虫卵も虫体も得られなかつた。角屋晋・高井秀雄・吉田忖成氏等 (1935) も同じ様な経験をされ、それ迄の報告でも頭節が見逃された例が多く、然し普通の駆虫法で虫卵は容易に陰転する所から、本条虫の頭節は極めて簡単に駆除し得るのではないかと言っておられる。私達は虫体一部の自然排泄から2カ月余りの期間、検便を繰返して終に虫卵を認めなかつた。江口・岩田両氏 (1951) に拠ると広節裂頭条虫について、第二中間宿主体内の幼虫を動物、人体に感染させた実験では、感染後の成虫の発育は極めて速かて、2~3週間後には尿便中虫卵陽性となる様である。之から類推して、私達は本症例では頭節も入院前すでに自然に排泄されてしまつたものと考えた。本条虫症が比較的珍しいのは無論第二中間宿主汚染の稀少性に原因するものと思われるが、そのほかに、本条虫の固有宿主が鯨類動物であつて、人体へは所謂偶然寄生として移行する上、人体が比較的不適な環境であつて、そのため感染しにくく、又感染しても虫体幼弱のうち自然に、或いは何等かの駆虫操作で簡単に駆除されてしまつたのではないかという臆測もなし得るのではなからうか。

本条虫症の症状としては、食思不振・悪心・嘔吐・腹鳴・腹痛・下痢・倦怠・頭痛・めまい・栄養障碍・貧血等が来ると言われている。私達の症例では3日間に亘る軽度の下痢と共に虫体排泄を見たもので、その他には著しい自覚症なく、本条虫寄生に起因する他覚的症狀を検索すべく各種臨床検査を試みたが、著明な陽性成績を得なかつた。

## 結 語

私達は、神奈川県江の島対岸の地域で感染したと考えられる大複殖門条虫症の一例を発見したので、その臨床症状、経過を報告し、感染経路としては此の患者の食生活上、若し海産魚類とすれば、アジ、イワシが最も疑わしいと思われることを述べ、二、三の考案を附した。

おわりに、終始御指導御鞭撻を賜つた院長野坂三枝先生、国立子防衛生研究所寄生虫部長小宮義孝先生、貴重な標本、文献を貸与された三浦雕二先生、面倒な調査依頼に心よく応じて下さつた鯨類研究所根本敬久先生、水産大学関根隆先生の御厚情によつてようやく此の報告を成し得たことを記して、感謝のこころに代えたい。

尙本論文の要旨は第15回日本寄生虫学会東日本支部大会に於て報告した。

## 文 献

- 1) 三浦雕二 (1937) : 大複殖門条虫の形態に関する補遺, 長崎医学会雑誌, 15 (11), 2379~2392. —2) 森下薫・竹本常松 (1953) : *Diplogonoporus grandis* の一例, 東京医事新誌, 70 (1), 17~18. —3) 江口季雄・岩田繁雄 (1951) : 寄生虫病の診断と治療, 第2版, 89. —4) Craig, Faust (1951) : Clinical parasitology, 第5版, 560. —5) 根本敬久 (1955) : 私信に拠る. —6) 岩田正俊 (1955) : 大複殖門条虫と鯨条虫との形態比較, 寄生虫学雑誌, 4 (2), 132~133. —7) 角屋晋・高井秀雄・吉田忖成 (1935) : 再び大複殖門条虫 *Diplogonoporus grandis* の寄生例を追加す, 長崎医学会雑誌, 13 (4), 388. —8) 江口季雄・岩田繁雄 (1951) : 前掲 (3) 書, 84.

## Summary

A human case of parasitism of *Diplogonoporus grandis* from Kanagawa Prefecture was reported and its clinical symptoms was discussed. As the source of infection a horse-mackerel or a sardine is considered by the authors, because this species of *Diplogonoporus* is considered originally a parasite of whale and the patient took eventually these fishes in raw for several times.